

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 27 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370427

研究課題名(和文) 東濃西部方言アクセントの研究

研究課題名(英文) A study on accent of the Tono dialect

研究代表者

安藤 智子 (ANDO, Tomoko)

富山大学・人文学部・准教授

研究者番号：00345547

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：岐阜県東濃西部にあたる多治見方言のアクセントについて研究を行った。この地域のアクセントは、おおむね東京方言や名古屋方言などのものと似ているが、語によって違いがある。調査の結果、「日」「葉」などは、多治見市をほぼ東西に流れる土岐川を境として、おおまかに北部は名古屋方言などのアクセントと同様に「日」「葉」が高く、南部は東京などのアクセントと同様に「が」が高いことがわかった。また、形容詞は全体的に名古屋方言と同じで、下がり目のあるアクセントであった。動詞は語形によって異なるが、名古屋と一致するものが多いなかで、全体として東京や名古屋よりも起伏の多いアクセントであることがわかった。

研究成果の概要(英文)： This study has a focus on accent of a dialect spoken in Tajimi city, which is located at the Western Tono district of Gifu prefecture. The phonological accentual system of the dialect is identical to that of the Tokyo dialect, but there are some differences in accent of each word. As a result of the research, we point out the difference in accent of some mono-syllabic nouns across the largest river in the city. This means that the river corresponds to a part of a boundary of two subcategories of the Tokyo accent area. As for adjectives, there is no word without falling tone throughout the city. Some forms of verbs have falling tone, which have flat tone in the Tokyo dialect.

研究分野：音韻論

キーワード：アクセント 方言 岐阜県

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本語の諸方言のアクセントに関する研究は、これまでに言語地理学的調査から通時的考察まで様々な試みが展開され、豊富な成果を得ている。しかし、地域的変種の中には詳細な記述が行われていないものも少なくない。東西対立を示す多くの項目の境界線が通る岐阜県の方言のうち、アクセントに関しては、その東西の境界線上重要な西濃地方を中心とした方言の記述は豊富であるが、語形では西の特徴を示しながらアクセントは東の特徴の強い東濃西部方言の研究は数が少なく(1音節名詞二類、2音節疑問詞、3音節名詞については奥村 1976)、内輪式とも中輪式ともとれる記述がある(山口 2003)。

東濃地方は、県庁所在地の岐阜市よりも、交通の便や産業の関係で名古屋市や瀬戸市など愛知県との関わりが昔から強く、そのため東濃地方の中心都市であり名古屋方面から東濃への玄関口である多治見市は尾張方言の影響を受けやすい位置にあると言える。実際、近年はベッドタウン化が進み、多治見市の周縁部には東濃方言を話さない住民が増えつつあるようである。それでも、名古屋市に比べれば若年層の方言使用は顕著である。このような状況において、多治見市の方言には大きな年代差・地域差が見られ、従来の方言を色濃く残す土岐市や旧土岐郡笠原町などの周辺地域と合わせると非常にバリエーションの豊かな状態が観察されるが、この状態が長く続くとは考えられず、一刻も早い東濃西部方言の総合的記述が望まれる。

(2) 先行研究からは、当該地域のアクセントは東京式の一種に属することが明らかにされているが、2拍名詞「靴」「坂」などが頭高になり、3拍名詞「頭」「油」、3拍動詞「帰る」が中高型になるなど、語彙的には東京式からの逸脱が見られる。申請者は、この語彙的・偶発的に見える語類の一体性からのずれに、他の音韻現象や語彙の親和度などの要因がかかわっている可能性がある」とみており、本研究はそれを確かめようとするものである。

(3) すでに、多治見市中心部のアクセント体系を調査するための予備段階として、当地における連母音の長母音化(安藤 2012)やピッチの遅上がりに関する研究を行っている。これをうけて、3年間の研究期間において東濃西部方言のアクセントを中心とした記述的研究を進めることとした。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、「東濃西部方言の総合的記述」および「共時的音韻現象に表れる通時的变化の普遍的方向性と機序」を明らかにしようとする2つの長期的構想のうち、今回の研究期

間内に具体的には次の点を明らかにしようとするものである。

多治見市の地域別および年代別の方言アクセントの変異

対象方言話者の語類別のアクセント(用言は辞書形および活用形)と共通語化および近隣のアクセントからの影響による変化の可能性

アクセントの変異の方向性に関する理論的分析

(2) これまでの東濃方言のアクセントに関する記述が岐阜県内から見た数十年前のものにとどまっている中で、共通語や名古屋方面の方言の影響を強く受けるようになった現在の状況を調査対象とする。

まずは、これまでの方言調査が語彙に偏っている当該地域の方言について、話者の属性との関わりを含めた全体像の把握を行う()。次に、その中でも特に共通語との違いが目立つ2モーラ名詞・3モーラ名詞・動詞の活用形のアクセントを精査して、共通語および尾張方言の影響を視野に入れて分布と変化を調べる()。さらに、活用形のアクセントの変化を申請者がこれまで行ってきたロシア語を中心とする屈折形態や音韻とアクセントとの関わりとの研究成果に照らし合わせ、比較する()。

3. 研究の方法

(1) 初年度はまず、多治見市の方言について、調査項目を選定するための基礎作業を行った。このためにまず、岐阜県及び愛知県の地域図書館において地域で作られた方言集を収集するとともに、大学を通じて学術的調査の文献を収集した。さらに、各アクセント語類の所属語の中で音声的親和度の高い語と低い語をデータベースに基づいて仮に区分した。次に調査項目作成の際に、当該方言の話者を協力者とし、意見を聞いて調査語彙を精選し、この調査項目を無理なく発音できるキャリア文に入れた調査票を作成し、当該地域において3週間の調査を行った。調査では、まず予備的に調査語彙の認知度について確認したうえで、面接による読み上げを行い、インフォーマントの許可を得て録音した。

資料音声は音響分析ソフトウェアによって分析し、客観的な一次資料とした。データを整理したものを、データベースソフトウェアを用いて言語地図の形にした。この調査結果は、翌年度以降の調査の基礎資料となった。

(2) 2年目は、まず、前年度の文献調査と面接による調査の結果により、補足的データ収集を計画し、実施した。データ収集は面接による読み上げ形式で行い、インフォーマントの許可を得て録音した。資料音声は音響分析ソフトウェアによって分析し、客観的な一次資料とした。

これまでの研究成果を調査地域へ還元し、調査対象地域の人々との意見交換するために、市民向けの講演(参加者 116 名)を行い、地域の FM ラジオ (FM Pi Pi) に出演するとともに、ホームページを作成してウェブ上に公開した。

さらに、名詞のアクセントに関して年代・地域別のデータを共通語化や近隣地域のアクセントの影響の観点から分析した結果を論文にまとめた(安藤 2015[雑誌論文])。

(3) 最終年度は、まず、前年度までの計画の中でインフォーマントが確保できなかった地域や年代について、その分のデータの欠落を補う補足的調査を行った。そのうえで、これまでに収集した資料について、語類ごとのアクセントに母音の無声化の有無や語の親和度がどのようにかかわっているかについて検討した。その後、当該地域のアクセントの記述をこれまでに明らかになっているアクセント変化の普遍性に照らし、比較・検討した。

調査結果のうち、動詞のアクセントに関して、内輪東京式のアクセントを持つ名古屋方言および中輪東京式のアクセントを持つ岡崎方言の文献資料と対照し、多治見方言の位置づけについて考察した論文を発表した(安藤 2016[雑誌論文])。

4. 研究成果

(1) 多治見市内各小学校区生え抜きの高齢を対象に、音声単語新密度が高い語を中心として読み上げによるアクセント調査を行った。その結果を総合的に見て、母音の無声化は少なく、アクセントへの影響は見られなかった(母音の無声化が盛んな東京では語類から予測されるアクセントからの逸脱が見られる「父」などの語も、多治見では語類からの予測どおり)が、特殊拍へのアクセント核付与に地域差が見られたことや、語によって共通語化の進み具合に年代差があることが明らかになった。具体的には、以下のとおりである。

(2) 名詞のアクセント

1 拍和語名詞のうち、1 類と 3 類は東京式アクセントとして大きく逸脱する点はない。2 類のうち、特に音声単語親密度の高い「葉」や太陽の意での「日」などは、特に土岐川右岸(市北西部)で有核が多く、市中央部～東部では有核と無核が混在し、南部ではほとんど無核である。このことから、市の内部に内輪式(「名古屋型」有核)と中輪式(「東京型」無核)の境界があることが明らかになった(図 1)。

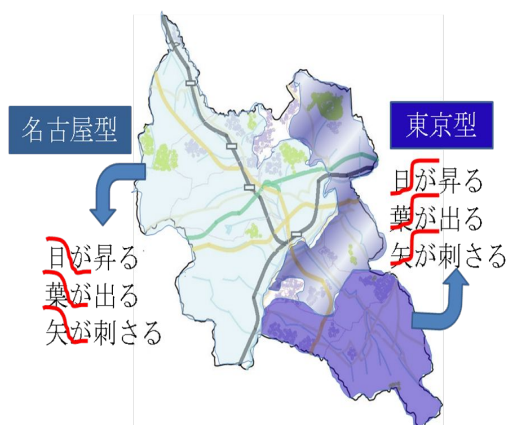


図 1

2 拍和語名詞では、東京で語類からの予測から逸脱する 2 類の「人」「蝉」や 3 類の「父」なども含めて、本調査では多くが語類から予測される東京式アクセントを示した。ただし、3 類の「靴」「坂」が頭高型(1 型)で現れるなど、名古屋と共通し東京と異なるアクセントも見られた。

3 拍名詞も、和語の多くは東京式アクセントを示す。そのなかで、「力」「うずら」「油」などが中高型(2 型)を示す。2 型は特に高齢の層に多く、共通語と異なるものとしては「さざえ」「鏡」「涙」「ハサミ」「わさび」「柱」などがあつた。1 型となるものには「悪魔」「廊下」などの漢語や「テレビ」「コップ」などの外来語、「病」のような使用頻度の低い語が目立つ。

4 拍名詞・5 拍名詞は共通語と一致するものが多い。その中で、杯の産地である市之倉地域を含めて「杯」は 3 型であつた。また、「色紙(いろがみ)」「小刀」の 3 型が大勢を占め、「クレヨン」の平板型(0 型)が半数を占めた点が特徴的である。

月名では、「五月」～「十月」は共通語と同じ型が優勢だが、「一月」「二月」「四月」「十一月」「十二月」は「月」の前にアクセント核が現れ、「三月」は 3 型であつた。「三月」を除くと、4 拍語は 4 型、3 拍語と 5 拍語は -3 型に揃っており、水平化の現象と見られる。

市内および近隣の地名については、3 拍語「多治見」「名古屋」「春日井」「瑞浪」「虎渓山」の 0 型、「姫」「高田」「長野」の 2 型、「笠原」の 3 型が特徴的である。

(2) 形容詞のアクセント

形容詞は市全体で起伏式であり、名古屋等の内輪式方言と同様に、諸活用形を含めてもアクセントの対立がないことが確かめられた。

(3) 動詞のアクセント

動詞終止形では、内輪式 / 中輪式の違いが指摘されているのは3・4拍一段動詞の1類であるが、多治見ではこの点では中輪式と同じ0型が優勢である。一方、内輪・中輪ともに0型とされるイ音便五段活用の1類動詞である「注ぐ」「働く」では-2型が目立つ。動詞終止形 + 接続助詞とも同様の傾向であった。このうち「注ぐ」は「使用しない」と言うインフォーマントが多数あり、このような馴染みの薄い語が有核になる傾向が示唆された。

動詞連用形 + ニで目的を表す形は、一段動詞の1類でニの直前で下がる型、五段動詞の2類2・3拍語でニの2拍前が核となる型という、中輪式に見られないが圧倒的である。その一方で五段動詞1類では中輪式と同じ有核の型をとる。

動詞連用形 + タイの希望を表す形は、全員が名古屋と同じくタを核とするアクセントであった。

過去形・中止形(～テ)・中接形(～テモ)は、イ音便五段活用の1類動詞では、名古屋と同じくタないシテの2拍前に核がある型が優勢である。ただし、市の周縁部(南部・北西部)では、音便のイが引き音として発音される特殊拍に核が来る型も目立つ(キータ「聞いた」、ハタラー]タ(働いた)等)。一段活用の2類3・4拍語では名古屋と同じ起伏式が圧倒的であり、1類2拍語も名古屋と同じで平板式である。一段活用2類3・4拍語は逆に中輪式の岡崎のアクセントとほぼ全員が同じであった。

強い打ち消しと呼ばれる～ヤヘンの語形は、名古屋と岡崎と多治見でそれぞれ少しずつ異なるが、その中で、一段動詞はヘンの2拍前が核となる型が圧倒的である。ただし、その位置に加えて「へ」にも核のように急激なピッチ下降が見られることがある。

～マデ(接続助詞)、～ナ(禁止)、～ン(打消)の3・4拍一段活用動詞では、岡崎と同じ型が圧倒的である。

仮定形 + 接続助詞バに相当する語形は、多治見では例えばナラベヤ「並べれば」のようになるが、そのアクセントはヤの前にアクセント核が来る名古屋と同じ型と、やまで高い岡崎・東京と同じ型が共存している。

動詞の個々の語形のアクセントを比較すると、内輪式の名古屋方言と同じものもあれば、中輪式の岡崎方言と同じものもある。その中で、特に山口(2003)が挙げる非中輪的特徴について検証すると、多治見方言のデー

タは名古屋のものとはほぼ一致しており、その意味で内輪式らしい特徴を有すると言える。

(4) 総合的な傾向とまとめ

調査結果全体から、東京や名古屋の方言に比べて多治見では起伏式の傾向が強いことが明らかになった。

動詞の強い打ち消し～ヤヘンなどの語形において、1つの文節に複数の顕著なピッチ下降が見られる場合がある。このようなアクセントの記述のために、イントネーションとあわせた音声学的記述が必要であることを指摘した。

調査地における講演や地域のFMラジオ出演、ウェブページやブログによって研究結果を地域の人々に還元するとともに、意見交換を行ってきた。それにより、研究成果を検証するとともに今後の調査の準備に資するものとなった。

< 引用文献 >

安藤智子(2012)「多治見方言における連母音の長母音化について」『富山大学人文学部紀要』58

奥村三雄(1976)『改訂増補岐阜県方言の研究』大衆書房

山口幸洋(2003)『日本語東京アクセントの成立』港の人

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

安藤智子、多治見方言における名詞のアクセント、富山大学人文学部紀要、査読無、62号、2015、23-58

安藤智子、多治見方言における動詞のアクセント(1)、富山大学人文学部紀要、査読無、64号、2016、36-69

安藤智子、東京式方言アクセントの記述 多治見方言の場合、現代音韻論の動向：日本音韻論学会の歩と展望、査読有、2016、印刷中

〔その他〕

ホームページ等

<http://tajimi-ben.jp/>

<http://blog.livedoor.jp/tajimiben/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安藤 智子 (ANDO, Tomoko)

富山大学・人文学部・准教授
研究者番号： 00345547